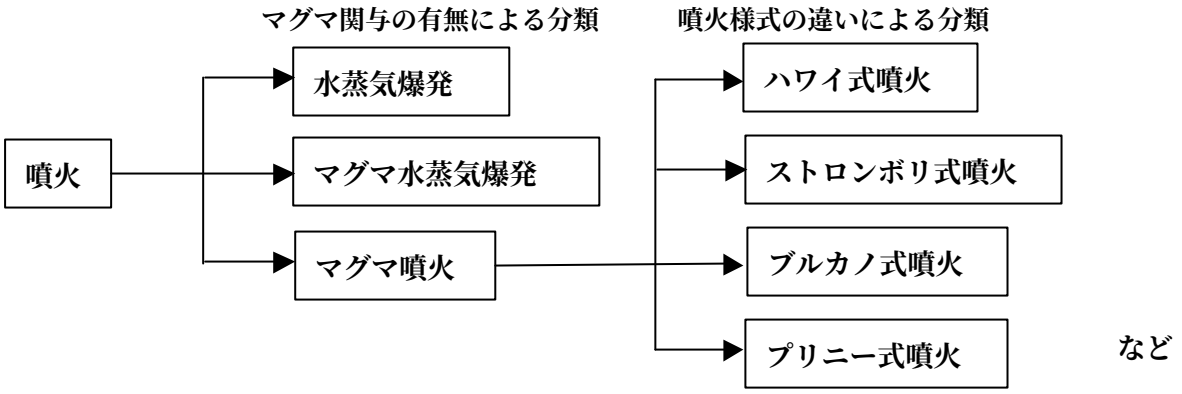
【噴火の定義と規模】

噴火とは、火口からマグマや火山灰などが急激に噴出する現象です。噴火は、マグマが直接関与したかどうかや、噴火様式などにより様々に分類されています。その概要はおよそ次のとおりです（各噴火様式の詳細については 2003 年 2 月号、3 月号の防災メモを参照してください)。



2 月 25 日に十勝岳で発生した噴火は、上の分類では、水蒸気爆発に入ります。水蒸気爆発は、マグマからの熱により熱せられた地下水が高温高圧の水蒸気となって爆発的に噴出する現象です。マグマが直接関与しないため、噴出物中に新鮮なマグマ物質が含まれないという特徴があります。

なお、水蒸気爆発という名称については異論もあります。一般的に噴火活動でいう「爆発」とは、火口や火道周辺の岩盤も一緒に吹き飛ばすような爆発的噴火のことですが、水蒸気爆発に分類される噴火の中には、表面上あまり爆発的でなく火山灰を噴出する程度の噴火も含まれます。そこで、水蒸気「爆発」ではなく水蒸気「噴火」と呼ぶ方が良いのではとの提案が、一部の火山学者からなされています。

また、単に噴火と聞くと、山麓まで噴石が飛ぶような噴火や、記憶に新しい 2000 年の有珠山の噴火をイメージされるかもしれません。しかし、約 9 万年前に九州の阿蘇山で発生した噴火の火山灰は､1,400km 離れた北海道東部でも 20cm の厚さに積もっていますし、一方今回の十勝岳の噴火の火山灰は、降雪の影響もありますが風下に 15km 離れた山麓の集落で確認されない程度と、噴火という現象は、その規模にたいへんな幅があります。

噴火の規模は、一般的には噴出物量などを尺度に「小噴火」「大噴火」などと分類されることがありますが、気象庁ではその分類について特に厳密に定義づけていません。今回の十勝岳の噴火は便宜的に「ごく小規模な噴火」や「微小な噴火」と呼んでいるものの、その表現や定義はまだ不確定です。

現在、気象庁では噴火の定義や規模の分類について見直しを進めています。